

2017年2月5日

「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。」 イザヤ 65: 17

イザヤ書後半（40章以下）で、預言者はバビロンから解放され故国へ帰る人々を慰めて来ましたが、いよいよ最後になって総括の言葉を語ります（終活！）。

これまで長い間、主は「叛逆の民」に「わたしはここにいる」と呼びかけ続け「ぶどうの房に汁があれば…祝福がある」として（貴腐ワイン！）、大切に守って来られました。「（湿地の）シャロン…（荒野の）アコル」も、「羊の群がるところ…牛の伏すところ」とされます。

「主を捨て」て、外国から来た「禍福の神（ガド）…運命の神（メニ）」に血道をあげる民を、「真実（アーメン）の神」である主は見ておられます。「わたしはお前たちを剣に渡す」と言いつつ、主に忠実な「わたしの僕ら」の故に、一刀両断に切り捨てないで忍耐されます。

現在の世界がどんなに暗くても、主なる神は最後まで責任をもって私たちに助けてくださいます。「だれの心にも上ることはない」ような世界が来る時、「泣く声…若死に…他国人が食べる事…生まれた子を死の恐怖に渡す」ことはなくなり（難民！）、「狼と小羊は共に草をはむ」平和が実現します（主の約束！）。

「新しい天と新しい地を見た」（黙示録 21: 2）と語る使徒と共に、私たちも「力の君」（讃 77 番）を讃えましょう。

2017年2月12日

「母がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める。」 イザヤ 66: 13

エルサレムの町では、神殿の完成が間近になっており、主なる神は民に向かって、これからの信仰生活などについて、まとめのような言葉を語られます。

「天はわたしの王座、地はわが足台」と言われる主は、神殿で再開される「牛…羊…穀物…乳香」をささげる礼拝が形式化し、民が「呼んでも答えず、語りかけても聞かず」という有様になることを心配されます。主は「わたしの言葉におののく人」を求められます（→百年史のタイトル「御言葉に導かれる教会」）。

エルサレムの町は復興が遅れていますが大丈夫です。「シオンは産みの苦しみが臨むやいなや、子らを産んだ」とあるように、主が多くの人々を与え、苦しんでいた人々は「彼女の慰めの乳房から飲んで…養われ…抱いて運ばれ、膝の上であやされる」でしょう。「霊が沈みこんでいると骨まで枯れ」（箴言 17: 22）ですが、「青草」のようになるでしょう。

ユダヤ人に限らず、主は「すべての言葉の民を集めるために臨み…わたしの栄光を国々に伝え」させ、「彼らのうちからも祭司とレビ人を立て」られます（→百年史に登場する日本人牧師たち）。

主なる神は母親のような愛を示され、「この世をしらす（統治する）」主イエス（讃 169 番）も、力強く優しいのです。

2017年2月19日（大阪教会との交換講壇）

「この人たち以上にわたしを愛しているか」 ヨハネ 21:15

かつて、主イエスが弟子達と伝道の旅を続けておられた時、主はペトロに、信仰を問われました（マタイ 16:15）。今、復活された主が、主イエスの羊を牧するため召された時、ペトロに愛を問われます。しかも、三度です。厳しい問いです。人格と人格とがぶつかり合う問いです。

「この人たち以上に」とは不思議な言い方です。愛は比べるものではありません。しかしここで主は、十字架に架けられる前の晩、ペトロが「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」（マルコ 14:29）と豪語したことを思い出させたかったのでしょう。この後、ペトロは三度、主を知らないと言います。

以前のペトロでしたら、胸を張って、「勿論、私は愛しています」と答えたことでしょう。しかし、この時ペトロが言えた最大限のことは、「主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」でした。失敗を通して、自分の愛の不徹底さが身に染みたペトロは、主語が、「私が」から「あなたが」に変わったのです。自分のあるかなきかの愛を、主の愛と憐れみとに委ねたのです。

主が、三度問われたのは、ペトロのこの告白を引き出すためでした。ペトロを徹底的に赦し、主との愛の交わりに招き入れ、新たな歩みをさせようとされたのです。ペトロは、この主の愛に応えて、伝道者・牧会者として歩み出します。（小柳牧師の説教要旨）

2017年2月26日

「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」 ヨハネ 3:3

主イエスのもとへ、年老いたニコデモがやって来ます。弱い者にも主は忍耐深く教えられます（→映画『沈黙』）。

ファリサイ派で七十人議会の議員であったニコデモは、「ある夜、イエスのもとに来」て、「あなたが神のもとから来られた教師」と信じて、人生の重大事を尋ねます（夜牧師を訪ねた渡辺源一師）。

主は彼の心の中にある願いを見て（→2:25）、「神の国を見る」ために「新たに（上から）生まれ」る必要があると語られますが、自分の努力で神の国に入るつもりでニコデモには想定外の答えでした（→小柳師「主語が変わる」）。大切なのは、「水と霊とによって生まれ」ることです。「水は聖霊であり、私たちを洗い清め、ひからびている心に天の命を与えるのである。」（カルヴァン）

とまどうニコデモに、「風は思いのままに吹く…霊から生まれた者も皆そのとおりである」と主は語って決心を促されます。この時の問答は結論に至らず、「イスラエルの教師でありながら、こんなことがわからないのか」と、主は厳しい言い方をされますが、それが後になって実を結ぶことになるのです（→19:39）。

人間の努力によってではなく、「いさをなき我を、血をもて贖い」（讃 271 番）たもう主を信じる者が神の国を見ます。